新聞４コマ漫画が描く安倍晋三・福田康夫首相（後編）

両首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析　2006～2008

Prime Ministers Shinzo Abe and Yasuo Fukuda in Newspaper Comic Strips (Part 3):

An Analysis of Comic Strips in the Three Major National Newspapers in Japan 2006-2008

水野　剛也
Takeya MIZUNO
福田　朋実
Tomomi FUKUDA

はじめに（前編・中編の要約と後編のねらい）

本論文は、安倍晋三・福田康夫両首相の在任期間中（それぞれ、2006年9月26日～2007年9月26日、2007年9月26日～2008年9月24日）に3大全国紙（『毎日新聞』・『読売新聞』・『朝日新聞』）の社会面に掲載されたすべての4コマ漫画（朝刊・夕刊とも）を精査し、そのなかから首相を描いている作品を網羅的に抽出し、それらが各首相をどのように描いているかを主に質的に分析する試みである。

本誌第47巻・第1号（2010年1月）に掲載した前編では、論文の目的・方法・意義・構成を説明した上で、量的な側面から全体像を俯瞰した。それをふまえ、本誌第47巻・第2号（2010年3月）に掲載した中編では、『毎日新聞』の「アサッテ君」（朝刊）と「ウチの場合は」（夕刊）、そして『読売新聞』の「コボちゃん」（朝刊）を質的に分析した。

本号に掲載する後編では、『朝日新聞』の「ののちゃん」（朝刊）と「地球防衛家のヒトビト」（夕刊）を同じ方法で分析し、結論として分析・知見を総括し、今後の研究課題や全体を通して得られる考察などを提示する。なお、論文末には付録として安倍・福田両内閣の略年表を添付してある。

1　本論文の目的・方法・意義、および構成

本誌前々号（前編）に掲載。

2　量的な側面から見た全体的な傾向

本誌前々号（前編）に掲載。

3　新聞4コマ漫画が描く安倍・福田首相

・アサッテ君　（東海林さだお）『毎日新聞』（朝刊）
・ウチの場合は　（森下裕美）　『毎日新聞』（夕刊）
・コボちゃん　（植田まさし）　『読売新聞』（朝刊）
} 本誌前号（中編）に掲載。

・ののちゃん（いしいひさいち）『朝日新聞』（朝刊）

『朝日新聞』の朝刊で連載されている「ののちゃん」（いしいひさいち）は、主人公・山田のの子の家族を中心として、家庭や学校における彼らの日常生活を描く家庭的な4コマ漫画である。山田家は5

人家族で、会社員の父親・たかし、専業主婦の母親・まつ子、中学生の長男・のぼる、小学3年生の長女・のの子、祖母・山野しげ、からなる。飼い犬のポチもいる。2009年の作者のインタビューによると、漫画の舞台は自身の出身地（岡山県玉野市）をモデルにした「たまのの市」であるという。(21)

「ののちゃん」は、その前身「となりのやまだ君」が改題されたもので、本論文執筆時点（2010年9月）でも4,600回を超えて継続中である。「となりのやまだ君」は1991年10月から1,935回の連載をかさね、1997年4月に「ののちゃん」に改題された。「となりのやまだ君」とあわせれば、連載回数は6,600回を超える。(22)

作者・いしいひさいち（本名・石井壽一）は、4コマ漫画を中心に多方面で活躍している漫画家で、「現代の4コマ漫画発展に大きな功績を残した一人」と評価する研究者もいるほどである。1951年うまれのいしいは、関西大学で漫画同好会に所属し、在学中の1972年から求人情報誌『日刊アルバイトパートタイマー情報』に「Ｏｈ！バイトくん」を連載しデビューした。1976年に大学を卒業後、「がんばれ！！タブチくん！！」（『漫画アクション』）、「経済外論」（『朝日新聞』）、「コミカル・ミステリー・ツアー」（『ミステリーズ！』）など、次々にヒット作を飛ばした。受賞歴も多く、第31回文藝春秋漫画賞（1985年）、第32回日本漫画家協会賞大賞（2003年）、第54回菊池寛賞（2006年）、などがある。2003年には「ののちゃん」で第7回手塚治虫文化賞短編賞を受賞している。(23)

安倍・福田首相の在任期間中、「ののちゃん」で首相を描いた作品は1本もなかった（709本中0本）。両首相とも1度も描かなかったのは、3大紙の4コマ漫画では「ののちゃん」だけである。

そもそも、「ののちゃん」はきわめて家庭色が強い漫画で、政治や政治家がほとんど登場しないという特徴は、少なくとも小泉政権時から変わっていない。先行研究（前編・後注3参照）によれば、5年5ヵ月の在任期間中、小泉を描いた作品は1,927本中わずか4本（0.20%）しかなかった。しかも、その4本のうち2本は「番外作品」（番号が付されていない作品）であった。「番外作品」は安倍・福田政権時には掲載されていない。「首相が登場することはめったにない」と先行研究が指摘しているように、あわせても2年しかつづかなかった両首相の在任期間中に1度も首相が描かれなかったことは、これまでの傾向に照らせば何ら不自然ではない。

首相を示唆する作品もほぼ皆無であったが、1本だけ安倍内閣のスローガン「再チャレンジ」を題材とする作品があったので、参考までに紹介しておく。2008年１月14日号の作品**（No.3823、図13）**がそれで、次のような内容である。

・やり直しの利くのの子の若さをしげがうらやむが、のの子はやり直しは「いやだ」という（1～2コマ）
・しげが「掃除当番ちゃう！　なんぼ失敗しても再チャレンジできるっちゅうことや」と諭すが、のの子は「失敗しても　失敗しても　失敗しても　失敗しても　チャレンジさせられるの？」と質問し、「そんなのいやだぁ」と反論する（2～4コマ）
・しげも、「それもそうやな」と得心する（4コマ）

図13　2008年１月14日号（No.3823）

安倍に関連する内容ではあるが、本論文が定義する「首相を描いている」作品とはいえない。また、「再チャレンジ」を批判的に扱っているという見方もできるが、明確に政治的風刺がなされているともいえない。

しかし留意すべきは、作者のいしい自身が時事問題に関心が希薄かというと、けっしてそうではないということである。最近出版された漫画研究書でも指摘されているように、本来、いしいが描く4コマ漫画のテーマは「政治経済、時事問題から哲学まで、多岐にわたる」。先行研究も、数こそ少ないが小泉首相を描いた作品は「痛烈な政治風刺を効かせ、意図して批判的な文脈で首相を描いている」と分析し、そのために「ののちゃん」を「純家庭的4コマ漫画」ではなく、まれに鋭い政治風刺をすることもある「家庭的4コマ漫画」として特徴づけている。しかし、その特徴は安倍・福田政権時には表出しなかった。(24)

したがって、先行研究がのべるように、「ののちゃん」は安倍・福田政権時においても「意図的に政治問題を避け、あえて家庭的な漫画に徹している」と解釈するのが妥当であろう。作者のいしいは連載3,000回を迎えた際に、「世の中がどうなろうと『しらんぷり』が『ののちゃん』の基本です」と語っている。その言葉を借りれば、本論文の分析期間中には作者が「しらんぷり」できないほどの出来事は起きなかったといえる。たびかさなる突然の辞任表明でさえも、同じく家庭色が強い「ウチの場合は」と「コボちゃん」では1度ずつ取りあげられたものの、「しらんぷり」している作者をふり返らせることはできなかったわけである。(25)

ただし、福田の後任の麻生太郎、さらに麻生につづく民主党の鳩山由紀夫や菅直人以降、いしいの意図的な無関心を途切れさせる首相があらわれるのかどうか、継続的に注視し研究をかさねていく必要がある。そうすることで、「ののちゃん」による首相描写はもちろんのこと、前編と中編で指摘した家庭的漫画の首相描写と社会的注目度の相関についても、仮説をより強固にする知見が得られるかもしれない。(26)

・地球防衛家のヒトビト（しりあがり寿）『朝日新聞』（夕刊）

『朝日新聞』の夕刊で連載されている「地球防衛家のヒトビト」（しりあがり寿）は、家族的な要素を多分に含みながらも旺盛な時事性・風刺性を特徴とする4コマ漫画である。「地球防衛家」は、会社員の父親・トーサン、専業主婦の母親・カーサン、会社員の長女・ムスメ、小学生の長男・ムスコからなる4人家族で、作者自身の説明によれば、「フツーの生活を送りながらも、世の中をよくしたいと正義感に燃える、いわばどこにでもいるような家族」である。彼ら以外にも、近所の人々、会社の上司や同僚、学校の先生や同級生、皮肉屋の「カエル」など、多彩なキャラクターが登場する。連載がはじまったのは小泉政権時の2002年4月で、本論文執筆時点（2010年9月）でも継続中である。(27)

作者のしりあがり寿（本名・望月寿城（としき））は、新聞4コマ漫画に限らず多領域で活躍している漫画家である。1958年に静岡県静岡市でうまれたしりあがりは、1981年に多摩美術大学を卒業後、ビール会社に勤めながら漫画を執筆・発表しつづけた。1994年の退職後は漫画家業に専念している。他の代表作に、『流星課長』（竹書房、1996年）、『ヒゲのOL薮内笹子』（竹書房、1996年）、『時事おやじ2000』（アスキー、2000年）、『弥次喜多 in DEEP』（エンターブレイン、2000年）、などがある。また、自身の仕事について論じた著作『表現したい人のためのマンガ入門』（講談社現代新書、2006年）やエッセー集『人並みといふこと』（大和書房、2008年）も出版している。第46回文藝春秋漫画賞（2000年）、第5回手塚治虫文化賞マンガ優秀賞（2001年）などの受賞歴、そして神戸芸術工科大学などで教歴もある。

安倍・福田の在任期間中、3大全国紙の4コマ漫画のなかで首相をもっとも多く描いたのが「地球防衛家のヒトビト」であった。安倍は295本中11本（3.72%）、福田は294本中8本（2.72%）の作品で描いており、いずれの首相についても他の4コマ漫画の合計を上回り、圧倒的な突出ぶりである。この漫画だけで、安倍では全作品（20本）の過半数、福田では全作品（11本）の実に70%以上を占め

ている。同じく時事性の強い『毎日新聞』朝刊の「アサッテ君」（安倍＝8本、福田＝2本）とあわせれば、全体の90%以上（31本中29本）を占めることになる。(28)

首相を描くという面での「地球防衛家のヒトビト」の突出ぶりは、小泉政権時から継続している。小泉は1,320本中41本（3.10%）の作品で描いており、やはり3大紙の他の4コマ漫画を合計した39本をしのいでいた。頻度（3.10%）も全体平均（0.83%＝9,565本中80本）の実に4倍に迫っていた。そして、その勢いは安倍・福田政権時にも引き継がれ、両首相をあわせた頻度は3.22%（589本中19本）と微増してさえいる。連載を開始して以来、他の漫画と比較してかなり高い頻度を維持して首相を描いていることがわかる。

次に、安倍・福田を描いた作品の質的な分析に移るが、その準拠枠として、小泉の作品を分析した先行研究の知見を活用する。それによれば、「地球防衛家のヒトビト」の首相の描き方のもっとも根本的な特徴は、首相の実際の言動や政策を主題とし、かつ強烈な風刺・批判を浴びせる、という点であった。この旺盛な時事性と風刺性を下地としていくつかの表現パターンが見られたが、安倍・福田の作品を分析する上では、とくに以下の諸点が有用である。

・地球防衛家の面々をはじめ一般庶民に首相を語らせる。
・他の政治家（海外の政治家も含む）と対比・並列して首相を描く。
・非現実的な架空の舞台を設定し、そこに首相を滑稽な人物として登場させる。
・作者自身のナレーションにより首相を風刺・批判する。

以後、作品の分析は上述の諸点を軸にすすめる。なお、「地球防衛家のヒトビト」では1本の作品に複数の表現パターンが混在している場合が多く、本論文の前編で分析した「アサッテ君」ほどには明確に類型化しにくい点をあわせて指摘しておく。

まず、安倍を描いた11本すべてにおいて、程度の差こそあれ、現実の政治問題を背景に何らかの風刺・批判が展開されている点はきわめて重要である。首相就任後はじめて安倍を描いた2006年10月4日号の作品（**図14**）はその一例である。著書『美しい国へ』（文春新書、2006年）や国会での所信表明演説（9月29日）などで安倍が強調した政治理念「美しい国」の抽象性を風刺する内容である。

・「美しい国を」とのべる首相をテレビで見ながらトーサンが、「美しい国って」「どうやって作るんだろう？」と考え込む（1〜2コマ）
・カーサンがやってきて、「美しい国は美しい部屋から」と掃除をはじめる（3〜4コマ）
・トーサンが「具体的！！」と得心して答える（4コマ）

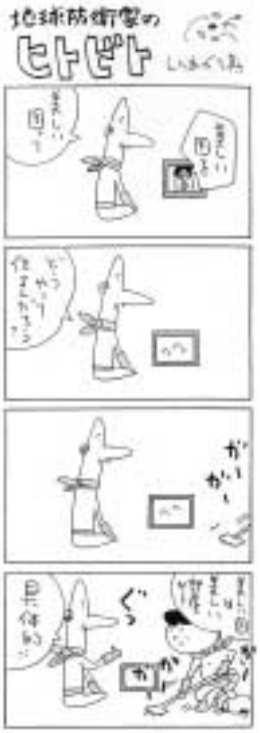

図14　2006年10月4日号

図15　2007年2月19日号

他の作品に比べればさほど辛辣とはいえないが、就任直後に早くも首相の政治理念を皮肉っているところに、「地球防衛家のヒトビト」の旺盛な時事性・風刺性を認めることができる。以下で紹介する作品には、それ以上に強烈かつ辛辣な風刺・批判を見いだせる。福田を描いた8本についても同じことがいえる。(29)

図14のように、地球防衛家をはじめ一般庶民が首相を語るというのは、「地球防衛家のヒトビト」では頻出する表現パターンである。安倍を描いた全11本で、何らかの形で地球防衛家の面々が首相を語っている。もう1つ典型例をあげると、2007年2月19日号の作品（**図15**）では、トーサンとカーサンが安倍と彼の政敵である小沢一郎・民主党代表を俎上に載せ、自民党と民主党の生彩のなさを、次のように皮肉っている。

・テレビに映る安倍を見ながらカーサンが「安倍自民党も期待されてたわりには」「なんかピリッとしないねぇ…」という（1〜2コマ）
・トーサンが「それ言ったら小沢民主党も」「全然パッとしないよー」と答える（2〜3コマ）
・トーサンが「ピリッとしない vs.パッとしない…」「ある意味参院選は伯仲した戦いに…」と語気を強める（4コマ）

トーサンがいう「参院選」（4コマ）は、この作品から約5ヵ月後の2007年7月29日に執行され、自民党の大敗に終わった。

なお、**図14・15**いずれにおいても登場人物はテレビに映る首相を評論しているが、本論文の中編で指摘したように、マス・メディアが伝える首相を庶民が見る・語るという構図は、「地球防衛家のヒトビト」に限らず新聞4コマ漫画全体に共通して見られる注目すべき特徴である。安倍を描いた11本でも、少なくとも7本がテレビや新聞の報道に関連づけて首相を描いている。これは福田を描いた作品にも共通する特徴であり、再度、言及する。

さらに、**図15**は他の政治家（小沢一郎）と対比・並列して首相を描いているが、これは他の漫画には見られない「地球防衛家のヒトビト」だけの特徴である。安倍を描いた11本中、少なくとも7本で他の政治家も同時に言及されている。その1つ2006年11月16日号の作品（**図16**）は、アメリカのイラク政策に協力した結果、テロの脅威に悩まされる安倍（4コマ）をアメリカのジョージ・W・ブッシュ大統領とともに描いている。その他の作品では、宮崎県知事に当選したそのまんま東（東国原英夫）、前首相の小泉純一郎、「光熱水費問題」の発覚後に自殺した松岡利勝農林水産相、事務所費問題で事実上更迭された赤城徳彦農水相、補助金不正受給問題で辞任した遠藤武彦農水相、などが安倍首相とともに描かれている。先行研究が論じているように、首相を他の政治家とともに描くのは「地球防衛家のヒトビト」の独自性であり、この漫画の政治問題への関心の高さを象徴している。

次に、非現実的な架空の舞台を設定し、そこに首相を滑稽な人物と

図16　2006年11月16日号

図17　2007年1月30日号

して登場させるパターンの作品もある。安倍を描いた11本のなかで、少なくとも7本がこの表現手法を採用している。**図16**もその1つであるが、その他にも、2007年1月30日号（**図17**）や同年7月10日号（**図18**）の作品がある。**図17**では、元お笑い芸人のそのまんま東が宮崎県知事に当選したことを受けて、一瞬の芸で観客をわかせる首相を皮肉っぽく描いている。**図18**も、頻発する問題の対応に追われる安倍を「アベちゃん危機一髪ゲーム」というモグラたたきの遊具になぞらえて風刺している。さらに、2007年9月5日号の作品は、あいつぐ閣僚の問題をハードルに見立て、ことごとくハードルにつまずき倒してしまう走者として、また2007年9月14日号の作品は、突然に辞任表明（9月12日）をした首相を行司の「待ったなし」がかかったあとに土俵を降りる力士として揶揄しており、いずれも同じパターンの表現方法を用いている。

現実にはありえないフィクショナルな状況設定で首相を風刺するこの描き方は、1コマの政治風刺漫画でよく見られる手法であり、ここに1コマ漫画と4コマ漫画との類似性を指摘することができる。同じことは本論文の中編で「アサッテ君」を分析した際にものべたが、首相をはじめ政治家を風刺する場合には、新聞4コマ漫画と1コマ漫画は共通した性質を有することがあるといえる。これも、今後の研究でより深く考究されるべき問題の1つである。

図18　2007年7月10日号

もう1点、「地球防衛家のヒトビト」だけに見られる特筆すべき表現方法として、作者自身のナレーションによる風刺・批判がある。安倍を描いた11本のなかでこの表現パターンを採用していると考えられるのは１本だけ、突然の首相辞任表明（9月12日）を題材とした2007年9月13日号の作品（**図19**）である。

・辞任表明する安倍をテレビで見て、トーサンとカーサンが驚く（1コマ）
・テレビに映る安倍の顔色が悪いことから、「重圧に負けたのか、責任ある立場を投げ出すって…」「最近のあの人とちょっと似てるなー」と意見をいいあう（2〜3コマ）
・作者のナレーション　「横綱の次は総理かあ…」（4コマ）

図19　2007年9月13日号

この前月に、夏巡業を休んだことを批判され本場所の出場停止処分を受けた大相撲の横綱・朝青龍が、出身国のモンゴルに帰国してしまうという出来事があった。移動式のテント住宅（パオ）と家畜の絵（4コマ）はそのことをあらわしている。

「横綱の次は総理かあ…」（4コマ）は、その世界で最高の地位にある横綱につづき首相までもが「責任ある立場を投げ出」（3コマ）したことを風刺しているが、本論文にとって重要なのは、その言葉が登場人物の

発言ではなく、作者自身のナレーションとして読めるということである。つまり、4コマ漫画という形式をとってはいるものの、作者自身による直接的な首相批判と読むことが可能なのである。この表現方法は3大紙の他のどの漫画にも見られない「地球防衛家のヒトビト」だけの特徴である。なお、作者は「カエル」を描くことで自身の意見を表明・示唆することもある。「カエル」については、福田首相を描いた作品を分析する際にあらためて言及する。

参考までに、小泉政権時にも作者のナレーションが使われた作品が1本だけあったので、その内容を簡潔に紹介しておく。2005年10月20日号の作品（**図20**）がそれで、首相就任後5度目となる靖国神社参拝（10月17日）に強く異議をとなえる文章が書かれているが（3～4コマ）、**図19**と同じく、登場人物の台詞としてではなく、絵の背景にナレーションとして記されている。なお、「小泉チルドレン」（4コマ）は2005年9月11日の衆議院総選挙で当選した自民党の新人議員をさす。

これまでの分析から明らかなように、「地球防衛家のヒトビト」において安倍はつねに何らかの形で風刺・批判される対象であるが、その一方で、いくつかの作品では安倍以外の他者にも風刺・批判がむけられていることは注目に値する。この点は首相の描き方という主題からはやや離れるが、「地球防衛家のヒトビト」の旺盛な時事性・風刺性を理解する上で看過できぬ重要な点であるため、以下に簡潔にのべる。

まず、首相以外にも政治家が登場することはすでに指摘したが、彼らや彼らが所属する政党が批判的に描かれることがある。2007年8月3日号の作品（**図21**）はその一例で、参議院選挙（7月29日に執行）での大敗にもかかわらず続投を表明した安倍を「地面に根の生えたような人」（2コマ）として皮肉ると同時に、「まさかこんなに勝つとは…」「これからいったいどうしたら…」（3コマ）と浮き足立つ野党の民主党議員も「地に足のついてないような人」（4コマ）と揶揄している。すでに紹介した**図15**では小沢代表率いる民主党が「パッとしない」と批判されているし、さらに**図16**でもアメリカのブッシュ大統領が泥沼にはまり、テロから逃げまどう人物として風刺されている。このように、首相に限らず幅広く政治家や政党を風刺・批判している点は、ジャーナリズムの権力監視・番犬機能の一種と見ることが可能で、新聞4コマ漫画の政治的コミュニケーション機能を理解する上で見逃すことができない。

上述の点に関連して、その後2009年9月には民主党が自民党から政権を奪取し政権交代を実現しているが、安倍・福田の在任期間中から民主党が批判的に描かれている（**図15・21**）ことを考えれば、民主党の首相に対しても同程度の批評性・風刺性が発揮されると予測できる。もちろん、この問題の解明は本論文の射程外であり、後任の麻生太郎の分析とともに、将来に残された重要な研究課題である。

図20　2005年10月20日号

図21　2007年8月3日号

さらに注目すべき点として、政治家だけでなく彼らを選んだ国民・有権者を批判的に描くこともある。一例として、2007年7月5日号の作品（**図22**）は、政治や政治家に「おもしろさ」を求める日本国民の風潮をいましめる内容である。

・カーサンとトーサンが「安倍さん人気ないのかなー」「小泉さんとくらべて地味なのかなー？」と話している（1コマ）
・テレビを見ながらムスメが、「やっぱり政権も」「見てておもしろくないと」「チャンネル変えたくなるのかな？」とチャンネルを変える（2〜4コマ）
・トーサンが「テレビと同じじゃまずいだろ」と注意する（4コマ）

図22　2007年7月5日号

一瞬の芸で観客を喜ばせる安倍を描いた**図17**も、視点を変えれば、そのまんま東を当選させるなど「タイクツさせない政治家を求めてる」（2コマ）国民を暗に批判していると読める。政治権力者だけでなく、彼らを選出した有権者一般にも批判の矛先をむけている点は、「地球防衛家のヒトビト」がいかに旺盛な時事性・風刺性を備えているかをあらためて印象づける。なお、本論文の分析期間中、3大紙の4コマ漫画のなかですでに退任した小泉前首相（**図22**、1コマ）を登場させているのも、やはり「地球防衛家のヒトビト」だけである。

次に、福田を描いた8本の分析に移ると、やはり旺盛な時事性と風刺性を下地として、基本的に安倍を描いた作品と同じ表現パターンが採用されている。

まず、地球防衛家の面々をはじめ一般庶民に首相を語らせる手法は、福田を描いた作品のほとんどで認められる。地球防衛家の人々が登場しない作品は後述する1本（「カエル」と「セミ」が登場する2008年9月5日号・**図27**）しかなかった。典型例として、2008年9月3日号の作品（**図23**）は、安倍につづいて福田が突然に辞任を表明（9月1日）したことについて、トーサンが「安倍政権もそうだったが」「首相辞任の前には必ず農水相が騒ぎをおこす！！」「これは地震の前の地震雲のようなものかもしれない」（3〜4コマ）と自説を展開するが、カーサンに「ちがうよ」（4コマ）とたしなめられる、という内容である。他の作品に比べさほど政治的な風刺が効いているわけではないが、テレビが伝える首相の辞任について一般庶民が論評するスタイルがとられている。安倍政権では、松岡利勝・赤城徳彦・遠藤武彦が農水相として問題をおこし、あいついで離職していた。福田政権でも、太田誠一農水相が食品の安全問題について失言をくり返し、その後、首相自身が辞任を表明していた。なお、前述のとおり、テレビなどマス・メディアの報道と関連づけて首相を描く手法は新聞4コマ漫画ではごく一般的で、福田を描いた8本中、少なくとも4本（**図23**を含む）で見られる。

図23　2008年9月3日号

他の政治家と対比・並列して首相を描くパターンも多い。福田を描いた8本中6本の作品でその表現方法が認められる。2008年5月20日号の作

品（**図24**）はその一例で、首相の支持率低迷を伝えるテレビを見ながらトーサンとカーサンが、アメリカ大統領選をめざすバラク・オバマとヒラリー・クリントンの「新鮮」（3コマ）さに感心し、「そうだ！！ 指名争いに負けた方に日本の首相をやってもらおう」（4コマ）と論理を飛躍させる、という内容である。他の作品では、自民党幹事長の麻生太郎、大阪府知事の橋下徹、太田誠一農水相、前首相の安倍などが福田とともに描かれている。アメリカの政治家についていえば、安倍政権時の作品（**図16**）でも、ブッシュ大統領が否定的な並列対象として描かれていた。

次に、非現実的な架空の舞台で首相を滑稽な人物として描くパターンも見られる。この描き方をしている作品は、福田を描いた8本中4本あるが、首相に就任した当日の2007年9月26日号の作品（**図25**）はその1つである。自民党総裁選で麻生太郎を破った福田を「派閥合体モンスター」（3コマ）として描いている。

図24　2008年5月20日号

図25　2007年9月26日号

一見してわかるように、**図25**では他の政治家と対比・並列して首相を描くパターンも同時に採用されている。モンスターに惜敗した麻生が、「勇者」気どりで「よーし復活の呪文だーっ！！」（3～4コマ）と調子にのり、秘書らしき人物に「マンガやゲームのやりすぎですよ」（4コマ）とたしなめられている。福田と麻生の双方に風刺・批判の矛先がむけられている点は重要である。麻生はその後、再度の自民党総裁選をへて首相に就任（2008年9月24日）し、その1年弱後の2009年9月16日に辞職しているが、就任前から批判的に描かれている点を考えると、首相になった後の麻生が「地球防衛家のヒトビト」でどのように描かれているかは非常に興味深い研究課題である。なお、福田の在任期間中、麻生は2008年9月19日号の作品にも登場しており、そこでは自民党総裁選の立候補者として他の4人の政治家とともに描かれている。

図25と同じく、首相を滑稽な人物としてフィクショナルな状況に置き、かつ他の政治家とともに描いている作品として、2008年1月30日号の作品（**図26**）を紹介しておく。

図26　2008年1月30日号

・タレント弁護士の橋下徹が大阪府知事に当選したことを伝えるテレビを見ながらカーサンとトーサンが、「やっぱり知名度がある方が有利なんだね」「もし、タレントの政治家がふえたら‥」「国会もバラエティー番組みたくなるかなー」と話す（1～3コマ）

・国会で壇上に立つ福田首相が、バラエティー番組の司会者のよう

に「そこんとこどないなっとんねん？」と他の議員に発言をうながす（4コマ）

導入部（1コマ）で橋下知事について触れ、最後に国会ではしゃぐ架空の福田首相と国会議員一般を描くことで政治家の「タレント化」を風刺している。(30)

次に、作者自身のナレーションとはいえないまでも、「カエル」を登場させることでそれに近い表現方法をしている作品も1本ある。2008年9月5日号の作品（**図27**）がそれで、次のような内容である。

・瀕死の「セミ」にむかって「カエル」が、「7年間も土の中で地面に出てきたら1週間の命だなんて‥」と同情する（1～2コマ）
・それに対し「セミ」は、「イヤイヤ、最近は何十年も政治家やって総理になったら1年なんて人もいますから…」といい残し、「ガク」と息絶える（3～4コマ）

この作品が掲載されるわずか4日前（9月1日）に福田が辞任表明していることから、「セミ」のいう「総理」（3コマ）が福田をさすことは明らかである。

「地球防衛家のヒトビト」の首相描写を理解する上で、「カエル」の存在を軽視することはできない。なぜならば、それがしばしば登場する定番キャラクターだというばかりでなく、登場人物は「みんなボクの分身。でも、カエルが一番近いかな」と作者自身が語っているからである。つまり、「カエル」の言動は作者自身の見解をほぼそのまま代弁していると考えられ、前述したナレーションによる風刺・批判と類似した表現方法だといえるのである。もっとも、**図27**で「総理」に言及しているのは厳密には「カエル」でなく「セミ」であるが（3コマ）、本質的に重要なのは「カエル」が登場している事実であり、両者の応答全体を作者の意見表明とみなすのが自然であろう。少なくとも、安倍につづきわずか1年で首相を辞任した福田を、作者がこの作品で強く風刺・批判していることは間違いない。(31)

上述の点に関連して、本論文が定義する「首相を描いた作品」には合致しないが、首相を描くことに対する作者の積極的な姿勢を明確に示している作品を1本紹介する。安倍の辞任表明から3日後の2007年9月15日号に掲載された作品（**図28**）がそれである。「次の首相はどんな人がいいか」について登場人物たちが意見をのべあい（1～3コマ）、最後に「某漫画家」が登場し「似顔絵の描きやすい首相がいいよ～」と願う（4コマ）、という内容である。「某漫画家」が作者自身であることに疑問の余地はない。この作品は、次期首相が決まってからも、そしてさらにその後も、作者が継続的に首相を描いていくつもりであることを示す証左として、本論文はもとより後続の研究にとってもきわめて大きな価値をもつ。

図27　2008年9月5日号

図28　2007年9月15日号

さらに補足として、「地球防衛家のヒトビト」には**図28**の3コマ目のように「子供」の視点で首相を描く作品がしばしば見られる。小泉政権時には、小学生の「ムスコ」たちの冷ややかな会話を通して大人社会のリーダーである首相を痛烈に皮肉る作品が目立った。安倍・福田政権時にはそれほど顕著でなかったが、それでも本論文の定義に合致しない作品ではあい変わらず多用されていた。麻生政権以降の研究では、「子供」の役割も1つの論点となりえる。

以上の分析をふまえ安倍・福田政権時の「地球防衛家のヒトビト」を総括すると、小泉政権時から引きつづき他の漫画に比べ圧倒的に多く首相を描いており、また、その描き方も他のどの漫画よりも多様で、かつ時事性・風刺性に富むことがわかった。同じ『朝日新聞』の朝刊で連載されている「ののちゃん」が、1度も首相を描かなかったのとはきわめて対照的である。「ののちゃん」が意図的に政治に無関心であるならば、それとは正反対に「地球防衛家のヒトビト」は意識して政治問題に取り組んでいるといえる。さらに、先行研究が特徴づけているように、同じ「時事的4コマ漫画」でも「世論反映型」の「アサッテ君」（『毎日新聞』朝刊）とはやや異なり、政治批評・風刺が旺盛で、かつ作者自身の見解が比較的にはっきりと示されている点で、「地球防衛家のヒトビト」は「自己主張型」だといえる。そしてその特徴は、連載が開始された小泉政権時からいささかも変わっておらず、今後も継続していくものと予想される。

最後に、首相をはじめ政治家一般を果敢に風刺・批判する「地球防衛家のヒトビト」には、前述したようにジャーナリズムの権力監視・番犬機能を見いだすことができるが、作者のしりあがりはそれをかなり意識的におこなっているといえる。この点は先行研究も指摘しているが、その後に出版されたエッセー集『人並みといふこと』（大和書房、2008年）からも裏づけられる。そのなかで作者は、笑いには「覚醒」と「麻痺」の2種類あると論じ、「自分の笑いは『覚醒』をめざそうと思った」とのべている。「覚醒」とは「プラスの価値をリセットする」こと、つまり権威や権力を引きずり降ろすようなユーモアである。なお、後者の「麻痺」はその逆で、「ダメな人やまずい失敗」といった「マイナスの価値をリセット」する笑いである。作者は別の箇所で、「新聞に載る四コママンガやちょっとした時事ネタのカットを描くとき、それぞれの事件に対する『人並み』の反応を探す」とも書いているが、この姿勢は一般庶民の視点から権力者を風刺・批判する「地球防衛家のヒトビト」の作風そのものであり、作者がジャーナリズムの権力監視・番犬機能を意識的にはたそうとしていることを明示している。(32)

4　結論　分析・知見の総括

本項では、先行研究と比較しながらこれまでの分析から得た知見を総括し、今後の課題などを提示し、さらに新聞4コマ漫画の権力監視・番犬機能について若干の考察を加える。

まず、本論文の前編で全体像を把握するために量的な側面を分析したところ、特筆すべき知見として以下のような諸点を見いだすことができた。

・両首相とも「アサッテ君」（『毎日新聞』朝刊）と「地球防衛家のヒトビト」（『朝日新聞』夕刊）で多く描かれており、この2つの漫画だけで首相を描いた作品の90%以上を占める。

・首相を描く漫画と描かない漫画との間に、かなり大きなへだたりがある。

・安倍のほうが福田よりも2倍近くの頻度・本数で描かれている。頻度を基準に「描かれやすい首相」を順位づけると、安倍が突出し、小泉と福田がつづく。

・新聞別では『朝日新聞』・『毎日新聞』・『読売新聞』の順となり、とくに『朝日新聞』が突出している。朝・夕刊別では夕刊のほうが頻度で3倍以上、本数で2倍近くも首相を描いている。

ただし、上述のように漫画により大きなへだたりがあるため、一般化には慎重を要する。
・両首相とも、支持率が低下するにつれ、より描かれやすくなっている。この結果は、空前の高支持率を記録した「絶頂期」（首相就任初年）にもっとも頻繁に描かれた小泉と比べ対照的である。
・両首相とも、突然の辞任表明前後に作品が集中している。新聞4コマ漫画が首相を描く多寡に影響を与えるのは、支持率の高低よりも、どれだけ社会の注目を浴びているかである、という仮説がなり立つ。
・比較的に文字で描かれることが多い小泉に対し、安倍・福田は画像（似顔絵）で描かれることがやや多い。

中編・後編でおこなった質的な分析では各4コマ漫画の特徴を明らかにしたが、全体を総括すると、以下に示すような共通点や傾向、あるいは仮説を見いだすことができた。なお、冒頭に「＊」がついている諸点は先行研究と重複するもの、「†」がついているものは本論文で新たに得られた、もしくは確証づけられた知見である。

＊ 家庭色の強い漫画では首相はほとんど描かれないのに対し、時事性が強い漫画では比較的に多く描かれる。
＊ 首相が登場する作品でも、ほとんどの場合、作中の中心的役割は主要登場人物など無名の一般庶民がになう。1コマの政治風刺漫画とは異なり、首相が主人公として単独で描かれる作品はほとんどない。
＊ただし、現実にはありえない架空の状況設定で首相を揶揄する作品には、1コマ漫画との類似性が見られる。
＊首相はしばしばテレビや新聞などマス・メディアの報道対象として描かれ、登場人物はそれを通して首相を語る。
＊首相に対する風刺・批判は、ほとんどの場合、登場人物を通して語られる。
＊新聞4コマ漫画にもジャーナリズムの権力監視・番犬機能の一部をになうものがある。

†家庭的な漫画は首相を描いたとしても政治色がきわめて希薄であるのに対し、時事的な漫画は政治的な批評性・風刺性を含む場合が相対的に多い。いずれにしても、首相を賛美・称賛するような作品は皆無である。
†安倍・福田がつづけて短期間で辞任したことが、首相の描き方に風刺性を付加し、時事的な漫画はもとより、家庭的な漫画でも題材になるほど社会的な議論を喚起したと考えられる。
†家庭的な漫画の首相描写には、首相にむけられる社会的注目度（テレビなどマス・メディアの報道を含む）がとくに深く関係していると考えられる。

次に、先行研究が示した新聞4コマ漫画のタイプ分けについても、上述の知見をふまえ若干の考察を加える。小泉を描いた作品を分析した先行研究は、首相描写の頻度や方法を基準に、新聞4コマ漫画を以下の4タイプに大別している。

・純家庭的4コマ漫画　家庭的な作風に徹し、政治家や政治問題をほとんど扱わないタイプで、「ウチの場合は」（『毎日新聞』夕刊）と「コボちゃん」（『読売新聞』朝刊）がこれにあたる。
・家庭的4コマ漫画　基本的に上のタイプと同じであるが、まれに政治家や政治問題を扱い、か

つ鋭い批評・風刺をすることもあるタイプで、「ののちゃん」（『朝日新聞』朝刊）がこれにあたる。

・時事的4コマ漫画（世論反映型）　政治家や政治問題を含め時事的なテーマを積極的に扱うが、作者自身の政治的見解やメッセージをぶつけるというよりは、もっぱら庶民の間で共有されているであろう社会の一般認識を反映するタイプで、「アサッテ君」（『毎日新聞』朝刊）がこれにあたる。

・時事的4コマ漫画（自己主張型）　政治家や政治問題を含め時事的なテーマを積極的に扱い、かつ作者自身の政治的見解やメッセージを比較的はっきりと表現するタイプで、「地球防衛家のヒトビト」（『朝日新聞』夕刊）がこれにあたる。

なお、先行研究によれば、それぞれのタイプは互いに排他的でなく、また1つの事例研究にもとづくあくまで暫定的な類型化である。

まず、もっとも重要な点として、安倍・福田政権時の漫画にも上の4類型は十分にあてはまり、抜本的な修正をほどこす必要性は見いだせない。「ウチの場合は」と「コボちゃん」は首相を描いた作品が1本ずつしかなく、しかも政治色がきわめて希薄であるため、「純家庭的4コマ漫画」のままでよい。「アサッテ君」は、両首相がつづけて短期間で辞任したためか政治的な批評性・風刺性を増しており、むしろより「世論反映型」らしくなった。「地球防衛家のヒトビト」も、あい変わらず時事性・風刺性が旺盛で、作者の意見表明とみなせる作品も複数あり、間違いなく「自己主張型」といえる。

ただし、「ののちゃん」の分類については今後、再考を必要とする可能性がある。小泉政権時には少数ながらも首相を鋭く風刺する作品があったが、それが安倍・福田政権時にはまったく見られなかったからである。その意味では、本論文の分析期間中に限ればむしろ「純家庭的4コマ漫画」に含めるのが妥当である。しかし、作者のいしいひさいちは、本来は時事問題に関心が高いにもかかわらず、「ののちゃん」では意図的に政治問題を避け、家庭的な作風に徹していると考えられる。つまり、今後ふたたび首相を風刺するような作品を描く可能性は十分にあるため、現在のところは「家庭的4コマ漫画」に分類しておくが、後続の研究では再検討を迫られることもあろう。(33)

いずれにせよ、小泉・安倍・福田の事例研究だけで類型化を確定できるわけではない。今後も継続的に研究をかさねることで、新聞4コマ漫画の理論化・体系化をよりいっそうすすめる必要がある。とくに、衆議院総選挙（2009年8月30日に執行）に大敗し、安倍・福田につづき1年弱で首相職を失った麻生太郎、自民党から政権を奪取し民主党の政治家としてはじめて首相に就任したもののわずか8ヵ月強で辞職した鳩山由紀夫、およびその後継者である菅直人に関する事例研究は、本論文を含む先行研究と比較考察する上できわめて優先順位の高い研究課題である。彼ら後続の首相については、分析結果がまとまり次第、本誌で順次発表していく予定である。

最後に、新聞4コマ漫画とジャーナリズムの権力監視・番犬機能の関係について若干の考察を提示して、本論文を締めくくる。まず、3大全国紙の4コマ漫画全体を俯瞰すれば、首相を描いた作品はわずか0.96%（3,206本中31本）にすぎず、なかにはまったく首相を登場させない漫画もあった事実には、つとめて冷静に留意しておく必要がある。でないと、首相を描いた一部の作品に注目するあまり、実態からかけ離れた過大な評価を下してしまいかねないからである。

しかし、かといって新聞4コマ漫画に権力監視の要素が皆無かというと、けっしてそうではない。むしろ、一般的に思われている以上に最高権力者の言動に目を光らせているともいえ、しかもその視点・観点には他の報道形態（1コマの政治風刺漫画も含む）には見られぬ独自性がある。

なかでもとくに顕著な特徴は、無名の一般庶民がマス・メディアに報道される首相を見る・語る、という構図が多用されていることである。これは、ともすればジャーナリズム機関全般に欠落しが

ちな、新聞4コマ漫画ならではの特質である。なぜなら、最高政治指導者である首相本人に接する機会をもてるのは、社会のなかでもごく一部の人々に限られ、圧倒的多数の市民はマス・メディアを通して間接的に首相を見知るからである。権力者を監視すべきマス・メディア自体が権力化しているという批判がなされる今日、新聞というマス・メディアの内部にありながらマス・メディアを相対化・客体化する4コマ漫画独自の視点は、より広く認知されてしかるべきである。

見方を変えれば、新聞4コマ漫画はけっして単純で無色透明な娯楽ではなく、現実の社会や政治問題をある程度反映した新聞報道の一部だといえる。時事的な漫画はもとより、家庭的な漫画でも、首相の言動が社会的に大きな反響をよんでいる場合には、一般的な市民の目線で首相を描くことがある。たとえそこに強い政治色が見られなくても、作中に首相が登場したということ自体がすでに何らかの意味を発している。新聞のなかで4コマ漫画は、そこだけ浮きあがった「孤島」というよりは、日常の報道と地つづきで、しかも一般読者の受けとめ方をそれとなしに伝える存在でもあるわけである。

ニュース報道の特性を社会学的に考察したゲイ・タックマン（Gaye Tuchman）の言葉を借りれば、新聞をはじめとするマス・メディアが人々と現実社会（首相でも同じ）をつなぐ「窓」だとすれば、新聞4コマ漫画はマス・メディア、そして場合によっては首相と人々をつなぐ「窓のなかにある小さな窓」のようなものだといえる。(34)

【注】

（21）小川雪「行こうののちゃんの町へ」『朝日新聞』2009年5月5日。

（22）いしいの病気療養のため、2009年11月21日号の作品（No.4882）を掲載後、「ののちゃん」は2010年2月いっぱいまで休載した。再開したのは同年3月1日号からであった。

（23）山口佐栄子「4コマ漫画」、夏目房之助・竹内オサム編・著『マンガ学入門』（ミネルヴァ書房、2009年）、12。いしいの著作歴については、山野博史「いしいひさいち著書目録」『関西大学年史紀要』第15号（2004年3月）：1〜52が詳しい。

（24）山口「4コマ漫画」、夏目・竹内編・著『マンガ学入門』13。

（25）いしいひさいち「『しらんぷり』基本に」『朝日新聞』2005年9月20日。

（26）本論文執筆時点までに、鳩山由紀夫を描いた作品が少なくとも１本（2010年4月21日号、No.4533）ある。麻生太郎と菅直人を描いた作品は確認できていない。

（27）「新連載マンガ『地球防衛家のヒトビト』　来月1日から」『朝日新聞』2002年3月25日夕刊。

（28）安倍を描いた11本は、以下の号に掲載されている。2006年10月4日号、11月16日号、2007年1月30日号、2月19日号、7月5日号、7月10日号、8月3日号、8月30日号、9月5日号、9月13日号、9月14日号。福田を描いた8本は、以下の号に掲載されている。2007年9月26日号、2008年1月30日号、5月20日号、6月26日号、8月14日号、9月3日号、9月4日号、9月5日号。

（29）安倍の首相就任は2006年9月25日号の作品でも描かれているが、掲載日が就任日（9月26日）の前日であるため、本論文が定義する「首相を描いている作品」には含めることができなかった。もっとも、これから首相になる安倍を描いているためか政治的な批判性は薄く、自分より若い首相が誕生することにトーサンが加齢を意識する、という内容である。その他、就任以前の安倍を次期首相候補者として描いた作品として、2006年5月29日号と同年8月23日号の作品がある。

（30）詳細は省くが、これと同じような作品がもう2本ある。その1つ、2008年8月14日号の作品は、他の政治家（失言を批判される太田誠一農水相）と対比・並列させながら、秘密の「本音封印壺」に不満・愚痴を吐きだす首相をユーモラスに描いている。もう1つ、2008年9月4日号の作品は、傘をさし国民を強雨から守る福田がその重責に耐えかねると、民主党と自民党の政治家が傘の奪いあいをはじめ、国民が雨に濡れてしまう、という内容である。

（31）河合真帆「しりあがり寿さん『僕の分身』　連載『地球防衛家のヒトビト』本に」『朝日新聞』2004年6月22日。「カエル」ではないが、擬人化された白クマが福田を皮肉るという作品もある。2008年6月26日号の作品がそれで、着ぐるみの白クマと福田が写る環境問題啓発のポスター（実在する）を題材に、北極で2頭の白クマがそのポスターを見ながら、「なんかイマイチだねー」「キャッチコピーが甘いんじゃないか？」といいながら、そのコピーを「世界の環境みんなで守ろう」から「キミもボクも生き残りをかけて」に修正する、という内容である。白クマは「こっちがいいんじゃないか？」「あちらの政権もあぶなそうだし」とものべているが、これも作者のナレーションに近い表現と解釈できなくもない。

（32）しりあがり寿『人並みといふこと』（大和書房、2008年）、65、202。

（33）実際に、後注26で指摘した通り、本論文執筆時点までにいしいは少なくとも１本の作品で鳩山由紀夫を描いている。

（34）Gaye Tuchman, *Making News: A Study in the Construction of Reality* (New York: Free Press, 1978).

【付記】

本論文をまとめるにあたり、東洋大学社会学研究科の大学院生諸君、および高木智江氏から協力を得た。この場を借りて謝意を表する。

【付録】

安倍晋三内閣の略年表

在任期間　2006年9月26日～2007年9月26日（366日）

2006年（平成18年）

7月20日　『美しい国へ』（文春新書）を出版。
9月26日　第90代首相に指命。内閣発足。
9月29日　国会で所信表明演説。「美しい日本をつくりたい」とのべる。
10月18日　第1回教育再生会議。
12月4日　郵政民営化に反対した元自民党議員（平沼赳夫を除く）が復党。
12月15日　改正教育基本法、防衛省昇格関連法が成立。
12月27日　佐田玄一郎行政改革担当相が政治資金問題で辞任。

2006年中の首相の主な発言

・日本が世界の国々から信頼、尊敬され、子供たちが日本にうまれたことを誇りに思える、美しい日本をつくりたい。（9月26日）
・（復党した元自民党議員に）皆さんお帰りなさい。美しい国づくりにむけ、一緒に汗を流していただきたい。（12月4日）
・教育における憲法とも言える教育基本法が改正されたことは本当によかった。（12月15日）

2007年（平成19年）

1月21日　宮崎県知事選で東国原英夫（そのまんま東）が当選。
1月27日　柳沢伯夫厚生労働相が「女性は子供を産む機械」と発言。
3月5日　松岡利勝農林水産相の光熱水費問題が浮上。
5月14日　国民投票法が成立。
5月28日　松岡農水相が自殺。
6月20日　改正イラク特措法、教育三法が成立。
6月30日　久間章生防衛相が原爆投下を「しょうがない」と発言。
7月3日　久間防衛相辞任。
7月7日　赤城徳彦農水相の事務所費問題が浮上。
7月29日　参院選。自民党が大敗。
8月1日　赤城農水相を事実上更迭。
8月27日　内閣改造。
9月 2日　大阪で世界陸上が開幕。
9月 3日　遠藤武彦農水相が補助金不正受給問題で辞任。
9月8日　アジア太平洋経済協力会議（ＡＰＥＣ）で各国首脳と会談。
9月10日　臨時国会で所信表明演説。
9月12日　突然の辞任表明。

2007年中の首相の主な発言

・美しい国づくりにむけて、礎を築くことができた。今年を美しい国づくり元年としたい。憲法改正を参院選で訴えたい。（1月4日）
・（東国原宮崎県知事の当選について）彼は再チャレンジに成功したんだ。（1月23日）
・（松岡農水相の自殺について）慚愧にたえない。任命責任の重さをあらためて感じている。（5月28日）
・（参院選での大敗を受けて）反省すべき点は反省していかないといけないが、改革を進めて新しい国をつくるために、これからも総理として責任をはたしていかなければいけない。（7月29日）
・（インド洋上での海上自衛隊の補給活動について）民主党をはじめ野党の理解を得るために、職を賭して取り組んでいく。（9月8日）
・（臨時国会での所信表明演説）50年後、100年後のあるべき日本の姿を見すえ、全身全霊をかけて、内閣総理大臣の職責をはたしていくことをお誓い申しあげます。（9月10日）
・（辞任表明）国民の信頼を得ることができなかった。私の責任だろうと思う。（9月12日）

福田康夫内閣の略年表

在任期間　2007年9月26日～2008年9月24日（365日）

2007年（平成19年）

9月23日　安倍首相の辞任にともなう自民党総裁選で麻生太郎らを破り当選。
9月26日　第91代首相に指命。内閣発足。
9月28日　首相の違法寄付金疑惑が浮上。
10月19日　守屋武昌前防衛事務次官の接待疑惑が浮上。
11月2日　小沢一郎・民主党代表との会談で大連立を構想するも失敗。
11月28日　守屋前防衛事務次官が収賄の疑いで逮捕。

2007年中の首相の主な発言

・私は冗談で「背水の陣内閣」というふうにいっております。（9月25日）
・（関連団体による領収書の宛名書き換えについて）一点の疑いもないよう努力する。最高責任者として汗顔の至りだ。（9月28日）
・（首相就任から１ヵ月の感想を問われ、「紅葉」の絵画をさし）私の心のなかは、この色ですよ。一生懸命やるしかない。（10月24日）
・（内閣支持率の低下について）まあしようがない。そりゃ、そういうことだ、ということで見ているしかない。（大連立構想に対する批判の高まりについて）失敗したんですから、やむを得ないんじゃないですか。（11月12日）

2008年（平成20年）

2月19日　イージス艦「あたご」と漁船の衝突事故。
3月19日　「ねじれ」国会の影響で日本銀行総裁が戦後初の空席。
6月11日　首相の問責決議が参院で可決。
6月14日　岩手・宮城内陸地震。
7月7～9日　北海道洞爺湖サミット。
8月 2日　内閣改造。
8月 8日　中国訪問。北京オリンピック開会式に出席。
8月10日　太田誠一農水相が食の安全対策について「消費者がやかましいから徹底していく」と発言。
9月 1日　突然の辞任表明。
9月19日　太田農水相が辞任。
9月24日　内閣総辞職。麻生太郎内閣発足。

2008年中の首相の主な発言

・国民本位、生活者本位の社会をつくるために全力を尽くしてまいりたい。1年たったら何かが変わったと、皆さんに実感してもらえるようにしたい。（1月4日）
・（小沢一郎・民主党代表との討論で）かわいそうなくらい苦労しているんですよ。（4月9日）
・政策を確実に実現していくと、そして安心を勝ち得るという意味において、安心実現内閣、そのように申しあげたいと思っております。（8月1日）
・（オリンピック選手団に）まあ、頑張ってください。せいぜい頑張ってください。（8月8日）
・（「辞任表明が他人事のように聞こえる」という記者に対し）私は自分自身を客観的に見ることができるんです。あなたと違うんです。（9月1日）

【Abstract】

Prime Ministers Shinzo Abe and Yasuo Fukuda in Newspaper Comic Strips (Part 3):

An Analysis of Comic Strips in the Three Major National Newspapers in Japan 2006-2008

Takeya Mizuno and Tomomi Fukuda

This research attempts to analyze qualitatively (and partly quantitatively) how comic strips of the three major national newspapers in Japan, *Mainichi, Yomiuri*, and *Asahi*, both in morning and in evening editions, have portrayed Prime Ministers Shinzo Abe and Yasuo Fukuda during their tenures, from September 26, 2006 to September 26, 2007, and from September 26, 2007 to September 24, 2008, respectively.

As the last installment of a three-part series, this article (Part 3) analyzes qualitatively how *Asahi*'s "Nono Chan" (Little Nono) and "Chikyu Boei Ke no Hitobito" (The Earth-Saver Family) have depicted Prime Ministers Abe and Fukuda.

At the end, this article sums up all findings of the series and presents conclusions.